

宮城谷昌光

*Kaishisui
Miyagitani
Masamitsu*
かいしすい

介子推



芥子推

宮城谷昌光

*Kaishisui
Miyagitani
Masamitsu*



講談社

宮城谷昌光

1945年、愛知県蒲郡市に

生まれる。早稲田文学部卒。

1991年『夏姫春秋』（海越出版社）に

より直木賞受賞。著書はほかに、『天空の舟』『王家の風日』（ともに海越出版社）、『

孟夏の太陽』『沈黙の王』（ともに文藝春秋

刊）、『俠骨記』『春の潮』『花の歳月』『春秋

の色』（ともに講談社刊）、『晏子』（新潮社

刊）等がある。

1994年『重耳』

（講談社刊）により芸術

選奨文部大臣賞を受賞。

現在、中日新聞・東京新聞等に『孟嘗君

を連載中。

介子推

1995年6月5日 第1刷発行

1995年6月30日 第2刷発行

著者 宮城谷昌光

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二二二 郵便番号 112-0101

電話 文芸図書第一出版部（03）5395-1350 四

書籍第一販売部（03）5395-1362

書籍製作部（03）5395-1361 五

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にてお替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第一出版部にてお願いいたします。

定価はカバーに表示しております。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Masamitsu Miyagitani 1995, Printed in Japan

目次・介子推

早春の怪

石氏の秘密

謎の老人

霊木の棒

離散

先軫

縣上の風

狐氏の邑

公子の臣

闍楚

7

25

45

66

86

107

129

149

171

191

火の謎

樹陰の白刃

苦難の旅

希望の国

反問

月下の影

ひらく道

西方の天

友の死

介山

214

234

255

276

300

323

344

366

388

407

介子推かいしすい

早春の怪

消えた。

友人の石承せきしょうばかりか、その父の石遠せきえんでもある。

介推かいたいに父はいないが、石承には母がおらず、ふたりは相手の親を自分の片親とおもって育ってきた。

十七歳の春である。

介推や石承の家は縣上めんじょうとよばれる集落のなかにあり、介推と石承の仲のよいことをみた里人たちは、ふたりの親たちが独身をつづけていることをあわれみ、

「いつそ再婚したらどうじゃろうか」

と、声高にいったことがあった。その声を介推はきき、母にいった。母は急に凜りんとした表情をして、

「わたしは二夫に嫁かするつもりはありません
と、澄んだ声でいった。」

——叱られた。

と、介推はおもった。子として母の貞純をためしたような悔いをおぼえた。しかしながら心のかたすみであたたかい喜びをおぼえたこともたしかであった。ひとりの女がひとりの男に嫁し、ひとりの男子をもうけたが、夫は子が幼少のうちに亡くなっても、生涯の伴侶をひとりとさだめ、余念をもたずに子を教育してきた。その婦人像はすつきりとあざやかであり、それが他人の母ではなく自分の母であるところに、介推はいっそうの誇りを感じた。

その自覚は、介推の身長が伸びたと同時に、心が育ったことのあらわれであつたが、おなじ心で石承の父の石遠をみると、

——この人も、すぐれた人だ。

と、おもえるようになった。

つねに優しい。

石遠と自分の母とをくらべてみると、自分の母のほうがきびしい、と介推は断言できる。もう一步考えをすすめてみると、石遠の優しさは、男しかもちようがない優しさともいえることに気づいた。

介推は石遠の怒った顔をみたことがない。

石承とともに草葺き屋根にのぼり、大きな穴をあけたことがある。穀物のたくわえにつかう陶器の甕かめを割ったこともある。そんなとき介推の母であれば、

「してはならぬことをしたのですから、叱りますよ」

と、いうであろう。

だが、石遠はちがう。

屋根をみあげて、草が腐ってきたかな、などという。甕の破片を手にとり、土のこねかたが浅かったのだろう、などという。そういう感想のひとつひとは、たとえば、

——形のあるものは、かならずこわれる。

というような、あきらめにも似た認識からは遠く、ものごとをかならず人の営為のなかでとらえ、人の工夫や努力の足りなさを訴えているようにきこえた。

おなじことばではないが、そのようなことを介推は母にいったことがある。すると母は、
「ああ、石さんは、人の限りということがわかつている人ですね」

と、即座にいった。

このこたえのほうが、介推にはむずかしかった。

石遠の優しさは、人の限りがわかつている優しさ、ということになろうか。

——ふしぎなことを母はいう。

介推は内心で首をかしげた。

石承は父とちがつて性格に圭角がある。わずかなことで怒りだすときがあり、虫のすかぬ者には声もかけず、あからさまに横をむくときがある。それだけに友人はすくない。

が、介推とは気があつて、ともに山野をはしりまわって育った。

縣上は黄河の支流の汾水の東岸にあり、ひろびろとした平野はもっておらず、東から太岳の山に迫られている。

その山から雪融けの水が縣上の集落にそそがれるころ、石承をしたがえた石遠が、
「山へ行ってくる」

と、隣人にいいのこして、二日経つても帰ってこなかった。

近所の者が心配して、山をさがしたがみつからなかった。

その話題を介推の耳にいれたのは、下人かじんの涓玄けんげんである。

涓玄は介推の父が生きていたときから、介氏の家ではたらいっている。涓玄にいわせると、「もともとこの縣上は介氏がつくつたようなものです。世が世ならば、あなたさまが君主というわけです」

と、介推にいった。

どこまで信じてよい話なのか、介推には見当がつかなかったが、おもいがけぬところから、誇りの種をもらつた感じであつた。

が、涓玄の話には多少の真実がふくまれていたのではなからうか。

汾水のあたりに棲んでいた古代の族を考えてみると、それは鬼方きほうとよばれる山岳民族である。この民族は狩猟民族でもあり、当時の王朝の商の羈絆きはんをきらい、商軍と戦いをおこなつた。時代が商から周へかわるころ、すでに狩猟をなかば捨て、農耕をおこない、あるところに定住する族が鬼方かいのなかにあらわれたと想像できる。それらの族は、

「隗かい」

と、よばれるようになった。

介推の介は、隗かいからきていると連想されなくはない。のちの介推の活躍をおもえば、かれの体内には狩猟民族の血がうしなわれずにあつたといえよう。

介推の家には、涓玄の妻もおり、さらに茲英じえいという童僕どうぼくもいる。茲英の父は下人ではなく、介氏の家をとりしまり運営をてつだう家宰かさいというべき人で、この人も死に、介推の父も死んで、家産が縮少したため、多くの下人が去つたにもかかわらず、茲英はのこつた。ゆくあてが

ないから、のこらざるをえなかったともいえる。茲英は介推より三歳ほど下で、介推の遊び相手にはちがいないが、つねに介推より一步も二歩もさがって、介推の従者のようであった。

介推の母はこの茲英をかわいがり、介推に学問をさずけるととき、かならず茲英を介推のうしろにおいた。

茲英の母のことはさだかではない。茲英は実母のことを憶い出しようがないらしく、介推の母を自分の母のように慕った。

介推の家にいるのは、五人ということである。

「石氏の父子が消えた」

と、きかされた介推は血相をかえた。

茲英が介推のかたわらにきて、心配そうに介推の顔をのぞきこんだ。

「茲英、ゆくぞ」

介推は飛び出した。石承の家に行ってもどうしようもないが、とにかく走りはじめた。茲英は息を荒らげて介推を追った。

人が集まっていた。

介推と茲英は足音をしずめて、里人たちの集まりに近づいた。

長老がしゃべっている。

「夕までは帰ると隣家に声をかけて山へ行つたのなら、山奥までさがす必要はない。また、あまり上へゆくと、雪崩に遭う。中腹のどこかで、足をすべらせたか、やまいになったか」

ここまで長老がいったとき、ふと目をあげ、

「おお、介推」

と、いい、手招きをした。

介推は長老に近づいて腰を落とした。

「介推は石承とよく山へ行つたであらう」

「はい」

「石遠とはどうだ」

「二、三度つれていつてもらいました」

「ふむ、おなじところへはゆかなかつたか」

「ちがうところでした」

「そうか——」

長老は腕を組んだまま、ため息をした。それから里人たちをみわたして、

「どなたか石遠と山に登つた人はおられぬか」

と、声を高めてきいた。

こたえはない。

「しかたがない。介推、石遠につれていつてもらつたところを憶えているか」

「憶えております」

「では、われらを先導できるな」

「できます」

介推のしつかりしたこたえにうなづいた長老は、ふたたび里人たちをみて、
「熊がでることがあるかもしれぬ。用心のために得物をもつてきてもらいたい」

と、いい、いちど解散させた。

介推は茲英をしたがえて家へ走って帰り、里人たちを案内して山へゆくことを母に告げた。母は眉をひそめた。すかさず涓玄は、

「わしも山へゆきましよう」

と、いつて、介推の母の憂色を消した。

介推の家には弓矢がある。

矢は弋^{よりう}猟につかうもので、糸がついている。それを涓玄はもった。

ふたりについてゆくつもりは茲英だったが、介推の母に、

「家にいるのです」

と、きつい口調でいわれたため、うらめしげにふたりを見送った。

介推の手にあるのは石^{せき}矛である。矛の先が石でできている。石の刃とはいえ、かなり鋭利で、小さな獣であればつらぬける。

石^{いし}遠の家^{とほ}のまえに集合した里人たちは、介推を先頭にして山にむかった。

山足には、むろん雪はない。

——春の匂いにみちている。

介推は深く呼吸した。やがて野山はみずから花で飾り、それをおえると緑をしげらせ、その緑を黄や赤に変じて捨て去ると、雪の下でねむる。その無限のくりかえしのなかで、ひとつの春は、はじまりとはいえないかもしれないが、これにつづく季節の未知なる息吹を感じさせてくれるだけに、胸をときめかせてくれもするが、せつなさも感じさせる。

だが今日の介推は春景色に染まっているわけにはいかない。

——石承よ、生きていてくれ。

と、心のなかで願いつつ、山径をのぼりはじめた。

「介推よ、早すぎるぞ」

と、後方から介推の早足をたしなめる声がきこえた。里人たちは石遠が山へ行った理由がわからないから、

「なにを採りにゆくつもりだったのか」

などと話しながら、ゆつくりと足をすすめた。

木陰にはいると冷気が介推の顔をなでた。雫が鳴っている林がある。雪は残っていないのに、なんの音であらうか。

「ほら」

と、涓玄が介推の肩を小さく突いた。

なかば陰になっている路に、鳥が降りている。

「雉か」

といった介推の声がきこえたわけではあるまいが、鳥はにわかに飛び立った。美しい大きな羽がみえた。

急勾配の坂路がある。そのあたりは土にしめりがあり、いたつてのぼりにくい。なんどもすべりながらあがってゆくと平坦な林がある。そこで介推は足をやすめ、後続の人たちを待った。

長老が杖をつき、腰をおしてもらって、この林に立つと、
「ここです」